

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

地域研究の舞台としてのマダガスカル：序にかえて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2012-05-17 キーワード: 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000939

第1章 地域研究の舞台としてのマダガスカル

——序にかえて——

飯田 卓

国立民族学博物館

本書では、全体を貫くテーマとして、島嶼性と大陸性を併せもつマダガスカルという地域像を提示する。このため本章では、先史学および歴史学の議論を整理し、そうした地域像を明確化した。いずれの分野においても、これまでは、海に囲まれたマダガスカルという島嶼性が強く表現されてきた。しかし近年では、地理的・文化的な多様性にもとづき、島内で展開した複雑な相互影響プロセスにも目が向けられはじめている。じっさいにマダガスカルは、島外からの影響を均質なかたちで受けとめるような小島ではない。むしろ大島であり、複数の文化が併存し、そのそれぞれが異なったできごとを歴史的動因として展開してきた。これら諸文化が互いに影響を与えながら、文化的状況がさらに複雑化するというのが大陸性で、地域研究の舞台としてマダガスカルが備えるユニークな点のひとつとなっている。あるいは、島嶼ゆえに受けた強力な刺激を大陸的に展開させるという両面性を、マダガスカルのユニークさと考えてもよいだろう。このことは、グローバル化に関する議論が進む現在、マダガスカルがユニークなかたちで島外と関わることにもつながっている。本章ではまた、人類定住が環境に与えたインパクトに関する議論が、自然保護をめぐる現代の議論にも連なることを示した。このように人文社会科学と自然科学が相互の距離を縮める点もまた、マダガスカルの地域研究の特色であるといえる。

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 はじめに | 4 島内におけるダイナミズム |
| 2 島への定住 | 5 島外との関わりとグローバル化 |
| 3 生物多様性をめぐる議論のホットスポット | 6 本書の構成 |

*キーワード：マダガスカル，地域研究，島嶼性，大陸性，多様性

1 はじめに

本書は、世界でもとくに多様な生活様式が併存しているマダガスカルに着目して、文化的現象のふるまいを論じたものである。さまざまな社会で長期的な調査をおこなってきた文化人類学者のほか、言語学や歴史学、生物学からも書き手を募ることで視野の幅を広げ、マダガスカルを舞台として人文社会科学一般をおこなうことの意義や条件を明らかにしようと努めた。

文化的現象にもさまざまなものがある。いっぽうでは、ある文化的背景のもとで個人のおこないが一定の型にはまってしまい、おこないの自由度に照らしてみると「文化に

拘束されている」かのようにみえる現象がある。これらについては、文化に関わる諸学が、もっとも初期から焦点を当ててきた。いっぽう反対に、新奇な技術やモチーフ、発明に個人が魅せられ、それをとり入れることで自身や後続世代の文化環境を豊かにしていくこともある。こうした現象については、とくに文化概念が相対化された近年において、文化人類学が主要なテーマとしてきた。いずれの文化的現象についての記述も、人びとが有する文化的背景を理解するのに役立つと同時に、人間性の一端を照らしだすことにもつながる。

マダガスカル地域の研究にかぎってみると、文化現象から人間の普遍的側面を照らしだそうとする傾向は、認知科学との対話を意識的におこなうモーリス・ブロックらに顕著である (Bloch 1998, 2005; Astuti *et al.* 2007)。本書に収められた論文のひとつひとつは、民族誌的事実を人間の一般性にまで高めて議論してはいない。しかしそれらの多くは、マダガスカルという文化的プロットのユニークさに関わっており、1巻にまとめることで、マダガスカルという舞台の特性を浮き彫りにする。これは、ブロックらの議論を補完することにもつながろう。

この序章では、マダガスカルの歴史に関わる先行研究を俯瞰しながらその歴史的条件を明らかにし、各章を先どるかたちで、マダガスカルという文化的プロットのユニークさを要約したい。なお、本章の題名に掲げた「地域研究」とは、マダガスカルという地域に特化した人文社会科学研究といういどの意味で用いている。農学や応用植物学などの自然科学的な分野も、歴史の展開や文化に関わるかぎりにおいて人文社会科学的であるだろう。そうした広い学術領域においてマダガスカルが提起する問題を、ここでは論じたい。

2 島への定住

人文科学をおこなう舞台という観点からマダガスカルの特徴をひとことでは、**「大きな島である」**ということになろう。「島である (大小に関わらず)」ことは2つの帰結をもたらすと、考古学者のドワールが論じている。ひとつは、人類の営為が遅い時代になってから展開しはじめたこと、もうひとつは、航海者たちをつうじて文化的影響を受けてきたということである (Dewar 1997a)。このことは、マダガスカルの島嶼性と要約できよう。

マダガスカルがたんなる島でなく「大きな」島であること、いわばマダガスカルの大陸性とでもよべる性格については、第4節で詳しく述べよう。ここでは、人類が島に到着した頃の状況に目を向けたい。

人類がいつ頃マダガスカルに住みはじめたかという問題に対して、考古学はいまだ明確な解答を出していない。現在のところ、多くの考古学者は、マダガスカルへの定住が

「第一千年紀のいずれかの時点で」始まったと述べるにとどまっている。つまり、西暦元年から1000年までのあいだのどこかの時点ということである。こうした広範な時間幅をとらざるをえないほど、考古学的な見地からの定住年代推定は不確実である。

そうした年代推定のひとつの手がかりとして、よくひき合いに出されるのは、動物の骨についていた金属器の使用痕である (MacPhee and Burney 1991)。問題の資料は、20世紀初頭に島の南西部で発見された。発見したのは、マダガスカルの博物学に多大な貢献をしたフランス人、アルフレッド・グランディディエで、絶滅したコビトカバの大腿骨に人類がはたらきかけた証拠として、パリの自然史博物館に収めた。その当時から、きわめて古いものだろうと推測されていたが、のちに資料分析方法が進展してから測定したところ、紀元前89年から紀元後70年頃のものだと判明した。

しかしこの資料は、組織的な発掘に際して地層から掘りだされたものでないため、上記の年代はあくまで参考にとどめられている。また、かりに地層を特定できたとしても、コビトカバの殺害者は漂流者だったという可能性もある。グランディディエが骨を発見したのは海岸近くだから、その可能性はなおさら高い。そうだとすると、この資料が属する年代に人類がいたということはいえても、その頃の島に人類が定住していたとまではいえない¹⁾。

人間の定住を確実に示す遺跡があらわれるのは、8世紀終わり頃である (Dewar and Wright 1993)。それまでの年代にさかのぼる考古学的遺物は、漂流者など、島に子孫を残さない短期訪問者によって残されたと解釈できるのである (Wright and Rakotoarisoa 1997)。

マダガスカル島への移住に関しては、考古学だけでなく、言語学の方面からも有力な仮説が出されている。マダガスカルで話されているすべての言語は、フランス語や英語、コモロ語、グジャラート語、クレオール語など島外に話者の多い言語をのぞき、マダガスカル語 (マラガシ語) の方言とみなすことができる。そのマダガスカル語が系統的に東南アジア方面の言語と関係すると判明したのは、16世紀終わりから17世紀初めにかけてだった。オランダの探検家フレデリック・デ・ハウトマンが、当時ポルトガル勢力下にあった東インド方面に遠征したおり、マダガスカル語とマレー語の語彙を書きとめて1603年に出版したのである (Dahl 1951)。このことがきっかけとなり、多くの研究者が、マダガスカルの言語や文化を東南アジア方面と関わらせて論ずるようになった²⁾。

よく知られているとおり、マダガスカル語は、アフリカ地域で話されている言語として唯一、オーストロネシア語族に属している。このグループに属する諸言語は、東南アジア島嶼部やオセアニア地域を中心に分布しているため、すぐれた航海術とともに広がったと考えられてきた。マダガスカルも、そうした言語-文化複合の流れをうけ継いでいるのである。

東南アジアからマダガスカルへの移住について、もっとも実証的でイメージ喚起力の

ある仮説を提唱したのは、ノルウェーの言語学者ダールであった。彼によると、マダガスカル語にもっとも近縁な言語は、インドネシアのカリマンタン島内陸地帯に住むマアニヤンの言語である (Dahl 1951, 本書第9章崎山論文も参照)。遠く離れたふたつの地域の言語の類似は、両地域をまたぐように移住が起こった証左だが、ダールはカリマンタンからマダガスカルの方向へ移住が起こったと考えた。

マアニヤン語に近いプロト・マダガスカル語を話す人びとは、マレー文化の影響が及びはじめた7世紀頃にカリマンタン島を離れ、スマトラ島を含む地域にたち寄ってスマトラ・マレー語やサンスクリット語の影響を受けた。しかしやがて、ヒンドゥー系のシュリヴィジャヤ朝から圧迫を受けたため、遠洋航海にたけた人びとの力を借りて、長距離航海にのり出した。マダガスカル語の一部方言にバジャウ語の影響を与えたのは、彼ら遠洋航海者である。彼らに導かれたプロト・マダガスカル人は、7世紀中頃もしくは紀元700年前後にマダガスカル島にたどり着き、定着してマダガスカル語話者の子孫たちを残した (Dahl 1991)。

ダールの仮説は、移住の歴史をきわめて細部にわたって説明しており、移住史の全貌を示しているという観がある。移住の年代も、島への定住を示す遺跡の年代に近く、論争が終わりにさしかかっているという印象すら与えてしまう。しかし、これらの細部にこそ、全体の議論に関わって検討する余地が残されている。たとえば、かりにプロト・マダガスカル人がシュリヴィジャヤ朝の影響を直接に受けたのではなく、シュリヴィジャヤ朝の影響を受けたマレー人と頻繁に接触したのだとすれば、移住の年代がもっと遅くても説明がつくし、プロト・マダガスカル人がスマトラ島地域にたち寄ったと考える必要もない (Adelaar 1989, 1995)。また、プロト・マダガスカル人がインドネシアからマダガスカルに直行したのではなく、東アフリカにたち寄ってバントゥ諸語をはじめさまざまな言語から影響をうけたと考えれば、シナリオはさらに複雑になろう (Blench 2007, 2008; Adelaar 2009, 2010)。

定住を示す最古の遺跡が8世紀であることと、プロト・マダガスカル人が700年前後に到着したというダールの仮説は、偶然の一致と考えたほうが無難だろう。プロト・マダガスカル人が東アフリカで長く逗留したと考えれば、早い時期にそれ以外の人がマダガスカルに遺跡を残した可能性もでてくるし、逆に、8世紀よりもっと後に本格的な移住が起こった可能性もでてくる。

いずれにせよ、文字に書かれなかった歴史を探る試みが、マダガスカルでは学際的に継続していけよう。近年では、考古学と言語学にくわえて、遺伝人類学や育種遺伝学などがDNA解読をつうじてこの問題にとり組むようになっている (Hurles *et al.* 2005; Razafindraibe 2008)。こうした先史学的な関心は、まちがいなく、マダガスカルにおける地域研究を特色づけるものである³⁾。

3 生物多様性をめぐる議論のホットスポット

第一千年紀の歴史に関わって、もうひとつ活発な論争を起こした話題がある。それは、環境考古学に関わる話題である。マダガスカルに人類が到来して自然環境が広範に破壊されたのか、あるいはそれほど大きな影響はなかったのかという点について、研究者たちはまちまちな見解をとっている。

前節において、絶滅したコビトカバの大腿骨に金属器の使用痕がみられたこと、そしてそれが初期移住者ないし漂流者の存在の証拠とされていることを述べた。じつは、大型哺乳類の骨に人類がつけた傷あとは、他にも報告されている。なかでも、複数の科にまたがるキツネザル類の骨に同様の傷あとが残っていることは、これらの哺乳類が人類の狩猟対象になっていたことを示している (Perez *et al.* 2005)。

よく知られているとおり、マダガスカル島は比較的早い時期に他の大陸から分かれて孤立したため、他の大陸からの影響をほとんど受けずに生態系を発達させてきた (Krause *et al.* 1997)。もっとも、影響がまったくなかったわけではない。マダガスカルのユニークな自然環境を象徴するキツネザル類は、マダガスカル島が他の大陸塊と分かれてから漂着して、その後適応放散したものと考えられている (Mittermeier *et al.* 2006: 23)。このような例外はあるにせよ、マダガスカル島の生態系が他の大陸から受けた影響はごくわずかで、しかも環境改変能力の高い人類もいなかったため、同地の生態系は「自生的に」進化をとげてきた。この点も、マダガスカル島の「島嶼性」をよくあらわしているといえよう。

人類や他の捕食者が不在だったために、マダガスカルのコビトカバやキツネザル類はさして高い淘汰圧を受けずに繁栄してきたと考えられる。そこへ人類が侵入してきた。人類は、みずからの捕獲能力によって大型動物に脅威を与えただけでなく、各種家畜の飼養や意図せざる外来種導入によって、さまざまな動植物に空前の捕食圧をかけた。また、耕地を開くなどの植生改変により、多くの種の居住環境を奪い、生態系のバランスを大きく変えた。マダガスカルに侵入した人類は、すでに金属器（鉄器）を使い始めていたのであり、ユーラシア大陸やアフリカ大陸のように旧石器時代から徐々に環境を改変してきたのではない。つまり、変化は漸進的とはいえ、人文社会科学の観点からはこの点こそがマダガスカル島の「島嶼性」をよくあらわしているといえる (本書第3章吉田論文を参照)。

そうした生態系変化は、どれほど深刻だったのだろうか。ある論者は、島の破壊といえるほどに大きなものだったと考えている (Burney and Flannery 2005)。絶滅したキツネザルのうち最大のもの、体重が160キログラムにのぼると推定され、ゴリラに匹敵する (Mittermeier *et al.* 2006: 44)。この種が減少しただけで、生態系への影響は大きかっただろう。しかし絶滅はこの種にかぎったことではなく、先にあげたコビトカバや

キツネザル類のほか、ダチョウよりも大きい巨鳥エビオルニス、大型のカメ類、複数の科にまたがる大型のキツネザル類などが、人類到来前後に絶滅している (Burney *et al.* 2004)。ただしここで「人類到来」としているのは、紀元前第一千年紀の時代で、定住者がほとんどいなかったと思われる時代である。また、土壌の環境考古学的分析によれば、やはりこの時代に炭化物出土量が増加したことと、出土する花粉の種類組成が変化したことが明らかになっている (Burney 1987, 1993)。つまり、火を用いた植生改変がおこなわれ、人類による環境へのインパクトが増大していると考えられるのである。

しかし、こうした見かたはあまりに単純すぎるという論者もいる (Dewar 1997b)。前節で述べたように、人類到来の時期そのものが、特定の時代の一点としてとらえられるものではない。また、後述するように、マダガスカルは単一の生態系によって成りたつのではなく、熱帯雨林から半砂漠にいたるまでの多様な生態的条件をそなえている。生態系の種類により、また人類登場時期の早さにより、環境変化はちがったかたちであらわれてきたはずである。さらに、マダガスカルに到達した最初の人類が漂流者ないし航海者であったことも、思いださなければならない。その人類の故地において、人びとは狩猟採集技術のみに依存するのではなく、農耕をはじめとするさまざまな資源利用技術を洗練するなかで航海術を発達させてきたはずである。人類到来と同時に島全体の規模で乱獲がおこなわれ、影響をもたらしたとは考えにくい。この問題については、島への定住時期の問題と同じく、より複雑なシナリオを想定して証拠を収集・吟味する必要があるだろう。

こうした議論は、考古学や古生物学のみならず、現代社会を対象とした地域研究にも深く関わる。マダガスカルの地域研究は、大げさにいえば、自然保護の潮流に対する立場表明から始まるという面があるからである。マダガスカル島内の生態系を人類全体の遺産とみなすべきか、あるいはローカル社会の一部とみなすべきかという二者択一の議論が盛んななかで、研究者個人が研究対象や分野をすでに限定してしまっている場合、自然保護についての「政治的」立場は、かぎられた自由度しかもちえない。

自然保護問題が決定的に政治化されたきっかけは、ラヴェルマナナ大統領が2003年に示した「ダーバン・ヴィジョン」であろう。南アフリカのダーバンで開かれた世界公園会議に大統領が出席したとき、彼は、マダガスカル国内に現存する保護区面積を5年間で3倍にすると宣言したのである。これが実現すれば、国土のじつに1割が保護区化されることになる。この展望に沿って2006年までに法整備がおこなわれ、海外の援助機関やNPOが保護区運営にあたるようにして、2007年から実際の保護区拡大が始まった (Madagascar n.d.)。2009年に非合法的な政権交代がおこなわれ、計画は頓挫しているものの、2011年現在もあたらしい保護区の設置は進行している。

生態学をはじめとするフィールド系の生物学にとって、この動きは歓迎すべきことだろう。しかしいっぽうで、村落在住者にとっては、従来利用してきた自然資源が利用で

きなくなる可能性がある。保護区の運営を担う団体の多くは、そうしたことが起こらないよう配慮している。しかし最終的には、運営主体と地域住民の合意形成が双方の目標であるため、いずれの関係者もできるだけ多くの権益を確保しようと模索しているのが実情である (cf. 安高 2009)。こうしたなかであって、人類学者や人文地理学者など、フィールド調査をつうじて地域住民と接する機会の多い研究者は、自然保護に傾いた動き自体を問題化して論ずることが多くなっている (Kull 2004; Gezon 2006; Keller 2008, 2009)⁴⁾。

環境考古学に話を戻そう。人類が環境に大きなインパクトを与えたという議論は、あまりに誇張して語られた場合、意図せざる効果を生む危険がある。すなわち、村落を拠点として自然資源を利用してきた人びとに環境管理能力がないと思わせる効果である。実際には、大型動物を減ぼしたのがプロト・マダガスカル人かどうかはわからず、その環境利用技術がどのようなものであったかもわからない。しかし、マダガスカルのユニークな動植物相、あるいは生物多様性のホットスポット (Myers *et al.* 2000) を保護しなければならないという国際的世論のなかで、そうした細部はないがしろにされたまま、環境考古学の成果が引用されつづけている。その結果、自然保護のプロフェッショナルである保護区運営団体が、地域住民にもまして発言力を得る傾向がある。つまり、村落開発をめぐる議論と地続きの議論として、地域研究者も環境考古学と関わらざるをえなくなっているのである。

人文社会科学と自然科学の境界がしばしば不分明になることは、マダガスカル地域研究のもうひとつの特徴とってよいだろう。本書ではこのことを意識して、植物学者としてマダガスカルで研究を続けてきた吉田 (本書第3章) から寄稿を得た。この論文にみられるような民族植物学的視点は、マダガスカル研究のなかではまだ大きく成長する見込みがある。それと同時に、現代マダガスカルの環境利用技術を実証的に示すものとして、注目を浴びる可能性が高い。今後は、文化人類学的方法論もとり入れて精緻化する方向で、この分野の議論を進めていく必要があろう。

4 島内におけるダイナミズム

前節において、マダガスカルが複数の生態系によって成りたつことを指摘した。さらに詳しくいえば、マダガスカル島は東西560キロメートルの幅しかもたないにもかかわらず、最高峰が2,876メートルに達し、年間降水量は400ミリメートルから3,000ミリメートルまでにおよぶ。砂漠気候から湿潤気候、さらには温帯に近い高地気候にいたるまで、きわめて多様な気候区と、それに応じた植生を有しているのである。このことは、マダガスカルの文化をとらえるうえで、大きな問題を投げかけている。誤解をおそれずに言うと、生態系の多様性は、マダガスカルの文化を単一のものとみなすか複数でとら

えるかという問題に関わっている（飯田 2008）。

急いでつけ加えると、筆者はなにも、ひとつの生態系がひとつの文化を生み出すという極端な環境決定論を述べているのではない。むしろ、マダガスカルを歴史的にとらえようとする立場に立っている。人類史的な視点に立ち、自然環境を生活に役立てることが初期文化の重要な要素であったとするなら、自然環境のちがいにかなり対応するかたちで、島内には異なる複数の文化が併存していたと考えられる。それがいつまで続くかは、いちがいに言えないものの、19世紀頃まではそのような見かたが依然有効だったと筆者は考える。その後、島内が政治的に統一されるにつれて、マダガスカル文化も統一されてきた。しかし、村落レベルの生活を成り立たせるうえでは、国内政治よりも自前の資源調達のほうが今なお重要であるため、見かたによってはあいかわらず文化の併存状況が続いているとみることできる。

マダガスカルを単一にとらえるか複数でとらえるかは、研究の目的や方法に応じて異なってもよい。しかし、人類学の分野では、複数でとらえるアプローチが今もなお有効なことが多いようだ⁵⁾。現代マダガスカルの人びとは、国内に18ないし20の民族があると信じており、あたらしく知りあった人たちがどの民族であるかを知りたがる（図1）⁶⁾。村落部の人びとも、週市などのさいに文化的他者と接する機会が多く、「異民族」のふるまいを怒ったり茶化したりすることがある。そもそも、これまでに出された民族誌がほとんどすべて、地理的に限定された個々の「民族」を対象としているといっても過言ではない。そして、マダガスカルにおける本格的な人類学的研究もまた、そうした地理区分の枠組みを受け入れることから始まっている（本書第3章吉田論文を参照）。

すでに述べたマダガスカル「大陸性」とは、このように複数の文化が併存しうることを意味している。なにしろマダガスカル島は、グリーンランド島とニューギニア島、カリマンタン島に次いで世界第4の広さを誇る大島である。きわめて多くの言語が存在するニューギニアなみに文化状況が錯綜していても不思議はない。しかもマダガスカル島では、湿潤地帯の広いニューギニア島と異なって、乾燥から湿潤までの気候区がそろっている。そして、地形や気候に応じて焼畑作、常畑作、灌漑稲作、牧畜、採集、漁撈などさまざまな基本的生業がみられる。その多様性は、アフリカ大陸に匹敵するといっただろう。アフリカ大陸もまた言語的に多様な地域であるが、マダガスカル島は小さな面積に多様性を凝縮している点で、アフリカ以上に多様だともいえるのである。

マダガスカル島の島嶼性に着目したドワールは、大陸性にも着目していて、次のように述べている。マダガスカルへの初期の移住者は海岸部に遺跡を残したのち、次第に内陸の空白地帯に進出し、現在では中央高地がもっとも稠密な人口を抱えるにいたった。いわば、歴史の舞台が海岸から内陸へと移動したのである。このような歴史のもとでは、海岸部に到着したプロト・マダガスカル人がさまざまな土地や生態系へ「適応放散」したと考えるだけではじゅうぶんでない。プロト・マダガスカル人は文化的に単一でなく、

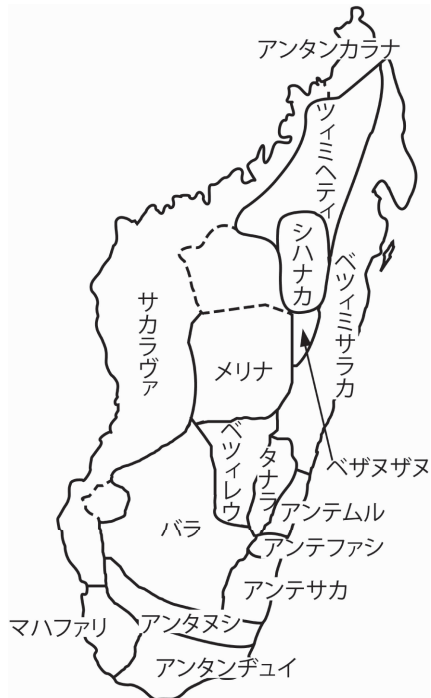


図1 マダガスカルで一般的に理解されている民族分布 (デシャン 1989を改変)

異なる時代に異なる地点に上陸し、内陸の複数の地点で出会って文化混淆をくり返したと考えるのが自然である。単一のプロト文化から各地域の文化が分岐したとする「文化の樹状モデル」でなく、起源を異にする複数の文化が混淆をくり返したとする「文化のリゾームモデル」を構想する必要がある (Dewar 1997a)。

ドワールによる問題提起は、先史学ないし考古学にむけてなされたものである。しかしこの問題提起は、マダガスカル史全般にとっても、さらには現代社会のみを対象とする地域研究にとっても重要だろう。マダガスカル島内の諸文化がいかに相互影響を与え続けてきたのか、それをダイナミックに描き出すことは、マダガスカルの地域研究全体にとっての未開拓領域である。さまざまなアプローチから、この問題にとり組むことが今後は重要になるだろう。これまでマダガスカルの地域研究は、ヨーロッパから受けた影響のみに関心を向けすぎてきた。より近隣の人びととの異文化接触、日常場面でも起こりうるほど頻繁な異文化接触とその刻印について、これからは光が当てられることと期待する⁷⁾。

本書では、言語学の方面から菊澤 (第4章) が、物質文化研究の方面から飯田 (第5章) がこの問題にとり組んでいる。それに加えて、安高 (第6章) や内堀 (第7章) らもまた、特定グループの民族誌を綴るなかでこの問題にふれている。現段階ではこうし

た些細な記述から考察を進め、「異文化接触の民族誌」にまで高めるための素材を探しつづけるべきだろう。

5 島外との関わりとグローバル化

マダガスカル諸文化が相互に受けてきた影響関係は、今後の課題領域である。いっぽうで、それらの文化が島外から受けてきた影響については、とくに歴史学の分野で多くの研究が蓄積されてきた。海で囲まれた土地において、さまざまな刺激が外からやってきたというわけである。この意味において、マダガスカル地域研究では、島嶼性がとくに強調されてきたといえる。

考古学資料に依拠する研究が島外との関係を重視してきたことは、すでに本章のこれまでの議論から明らかだが、時代がくだっても同様である。とくにユーラシアで中世とされる時代には、海岸部でみつかるといわれる交易拠点の遺跡が、マダガスカル歴史において重要な役割をはたしたとして脚光を浴びてきた (Vérin 1986; Rakotoarisoa 1997, 1998; Radimilahy 1997)。

文献史学においてもこの傾向が強い。そもそも中世にはマダガスカル語文献が皆無といえる。アラビア語やペルシア語などで記された文献のみが手がかりとなるから、マダガスカルのできごととも島外からの航海者の目をとおして綴られることになった (Ferrand 1907, 1907-08, 本書第12章花瀆論文も参照)。16世紀に入り、ヨーロッパ人航海者の記述が資料となっても、同様である (Esoavelomandroso 1984)。アラビア語文字で書き残されたマダガスカル語の口頭伝承もあるが、資料としてはきわめてかぎられたものでしかない (Munthe 1982; Domenichini-Ramiaramanana 1988)。19世紀にマダガスカルでキリスト教会の活動が活発化して、ようやくマダガスカル語の口頭伝承も記録されるようになるが (Callet 1974)、やがてマダガスカルはフランスの保護領そして植民地となり、歴史の動因を島外に求める視点はかえって強化されることになった。

資料の制約を考えれば、これもしかたのないことかもしれない。しかし、近現代史があつかう時代にまで下ると、島外に歴史的動因を求める研究も、島外から島内へという一方的な影響関係でなく相互影響関係を次第にあつかうようになる。そして、内と外という区別が無効となるグローバル化状況にも応用できるような視座を確保していく。いかにいえば、島嶼性を強調するような歴史研究も、近現代史では異なるニュアンスを帯びようになってきており、その変化がまさしくマダガスカル歴史研究の特色を示している。このことは、島外との関わりをあつかった本書所収の2論文において、それぞれ別のかたちでみることができよう。

ひとつは、マダガスカル島の北西にある属島ヌシ・ベのフランス保護領化を考察した鈴木論文 (第10章) である。保護領化と植民地化の過程は、これまでの歴史学において、

マダガスカルとフランスの外交という観点からとらえられてきた。しかし鈴木は、保護領化が契機となってヌシ・ベガインド洋交易の結節点となり、国内諸港のみならずアフリカ地域や南アジア地域と関わりを深めたことを示している。鈴木は、たんに島外からのインパクトに着目するだけでなく、そのインパクトが地域間関係におよぼすダイナミズムにも着目しているのであり、マダガスカルの島嶼性だけでなく大陸性にも議論をおよぼしているといえよう。

しかし、鈴木自身はおそらく、島内のダイナミズムよりもむしろ大陸間のダイナミズムを強く意識しているのにちがいない。交通や通信があるていど発達した19世紀、あるひとつのできごとは、隣接する諸社会だけでなくより遠方の地域にも波及するようになっていた。鈴木は、こうした時代状況を論じているのである。つまりこの時期には、大陸的なダイナミズムがグローバルなダイナミズムへとスケールを拡大したのであり、そのことがマダガスカルの島嶼性にあらたな性格を帯びさせた。ひとことでいえば、島外からのインパクトは島内で吸収されるだけでなく、島外へも容易にフィードバックされるようになったのである。

19世紀における島外との交渉をあつかったもうひとつの杉本論文（第11章）は、この展望を別のかたちで示している。杉本は、野蚕を用いた伝統的な絹（シルク）生産がイギリスやフランスの養蚕技術によって変化したことを述べる。しかし、伝統的な要素は、島外からのインパクトによって消滅したわけではない。現代では、野蚕と家蚕の両者を用いた独特のショールが、外国人観光客の人気を集めているという。このように、島外からのインパクトは、時間差をおいて島外へフィードバックされることもある。こうした点を視野に入れた島嶼性の研究は、グローバル化の問題と接続することで、マダガスカルという舞台のユニークさを示すことにつながるだろう。

6 本書の構成

以上のように、マダガスカルにおける地域研究は、島嶼性と大陸性という両側面から展開させることが可能であり、この点にユニークさを認めることができる。しかしこのことは、本章だけでなく、本書全体をつうじて理解していただくのがよいだろう。12論文から成る本書は、以上の点を念頭に、4部に大きく分かれる。

第1部「多様性」では、本章にひき続き、マダガスカルの自然と文化の多角的構成を具体的に示す2章を取めた。深澤論文（第2章）は、マダガスカルにおいて本格的な人類学的調査をおこなったラルフ・リントンの業績をとりあげ、島内の文化の多様性をいかに把握しようとしたかを論じている。深澤も認めるように、現在ではリントンの方法論が通用しない面もあるが、マダガスカルの大陸性についての考察を深めるうえでリントンの著作は今なお重要であろう。吉田論文（第3章）は、植物学の立場からマダガス

カルの物質文化を広く概観したものであり、民族植物学のイントロダクションという性格をもつ。マダガスカルの大陸性は、ひとつにはその植生の多様性に由来しているため、吉田論文はマダガスカルの大陸性を理解するうえで大きな手がかりとなるだろう。

第2部「大陸性」では、第1部で示された多様性の要素が相互に影響を与えあい、より複雑な発展を示してきたことを、言語学と物質文化研究という異なる分野から展望したものである。菊澤論文（第4章）は、マダガスカル語にみられる方言差に着目した言語学的研究で、現在は標準化されつつあるマダガスカル語も、言語発達の歴史を解明する手がかりとなるとしている。その背景としては、マダガスカル語が地域によって異なった発達をとげてきたことと、それらの地域的な言語がさまざまな相互影響をおよぼしてきたことがあげられよう。飯田論文（第5章）は、マダガスカルの船の外形と製作技術をもとに、各地域の技術要素を比較したもので、それぞれの技術要素がいかに関わりあいつつ伝播していったかを考察している。造船技術などは工具の普及によって標準化しやすいと思われるが、作り手と使い手両方のハビトゥスを反映するため、かえって複雑に変化する。菊澤論文も飯田論文も、言語圏交流ないし技術圏交流の複雑なダイナミズムの全貌を描きだしているわけではないが、それを試みるための端緒として意味をもっていよう。

第3部「凝集性」は、島嶼性と大陸性をもったマダガスカルという舞台設定をひとまず離れ、文化人類学の伝統にしたがってミクロな民族誌的实践をおこなった成果である。ここでいう凝集性は、あくまで比喩的なイメージである。マダガスカル島内の人びとが均質にマダガスカル人であるのではなく、文化的背景におうじて相互関係が疎であったり密であったりする結果、いくつかの凝集塊を成しているという事態を想いうかべている。しかし、こうしたマクロなイメージも、なにが親密な関係のもとになっているのかというミクロな民族誌的関心を抜きにしては、空疎なものにとどまることになるだろう。

偶然にも、ここに集めた3つの論文はすべて、死に関する習俗をあつかっている。あるいはこれは偶然ではなく、マダガスカルにおいては、死者をめぐる実践が生者にとって重みをもつという事態を示しているのかもしれない（Bloch 1971; 森山 1995）。いっけん、マダガスカルの舞台設定とは関係が少ないように思われるこれらの論文も、じつはよく読むと、個別民族のモノグラフを超えて民族間の交流をかいま見せてくれる。安高論文（第6章）においてタナラナ人がマハファリ人から距離を置こうとする傾向や、内堀論文（第7章）のザフィマニリ人に対するメリナ人の影響などである。森山論文（第8章）は、いわゆる文化変容ではなく、むしろ長い歴史を貫く文化的持続を問題化する。そのなかで森山は、民族内部で抗争していたメリナ人が他民族に戦争をしかけ、さらには島内が平定されて島外へ活動の場を広げていくなか、死者の具体的なとりあつかいは変化するものの、故人の遺骨を集団の内部にとどめおくという倫理は一貫していたと論じる。こうした「凝集性」に関わる議論は、マダガスカルの地域文化の動態を考察

するうえで、大きな示唆を与えている。

第4部「島嶼性」に取められた論文は、第1部および第2部と対照的に、海で囲まれたマダガスカル島という舞台設定がよくあらわれている。崎山論文（第9章）は、マダガスカル語にあらわれる魚名を言語学的に考察したもので、植物名を考察した第2部の菊澤論文（第4章）と一対をなすとみなすこともできよう。しかし、菊澤論文に較べると島外との関わりをより強く意識しており、マダガスカル先史学の伝統を認めることができる。鈴木論文（第10章）と杉本論文（第11章）については、前節でかなりふみ込んだ紹介をした。いずれの論文も、島嶼性ゆえに受けた強力な刺激を大陸的に展開させるというマダガスカル的なダイナミクスが、グローバルな舞台でくり広げられるようすを描いている。マダガスカルの地域研究の今後の展開を予感させると同時に、グローバル化研究にも大きな示唆を与えるように思われる。

同じく第4部の花渕論文（第12章）では、もうひとつの島嶼であるコモロ諸島地域とマダガスカル地域の交流史をまとめた。内容的には一部が鈴木論文（第10章）と重なっており、マダガスカルの島嶼的歴史をインド洋の視野からみるという意味でも、鈴木論文を補完している。また、論文の後半部では20世紀に視点を絞りこみ、杉本論文が部分的にしかあつかえなかった交通緊密化の現状にまで論をおよぼしている。コモロ系移民やマダガスカル系移民のグローバルな移動という研究テーマは、花渕自身が述べるようにまだ緒についたばかりであるが、この論文はその序論ともなっている。島嶼性に着目した交流史研究が、グローバル化研究に接続しつつあることをよく示していよう。

以上4つの分類は、とりあつかう空間と時間のスケールをふまえつつ分けたものだが、もとより明確な分類とはいえない。しかし、そのような区分に忠実である研究よりも、そうでない研究のほうが、今後は有益な知見をもたらすのではなからうか。レベルの異なるスケールを往還し、特定のスケールのもとで見えなかった影響関係を解きほぐしていくことこそ、「大きな島」であるマダガスカルの地域文化の動態を明らかにする王道であるように思える。

注

- 1) なお近年、同様の動物考古学的資料で、紀元前2000年にまで遡るものが見つかったと報告された (Gommery *et al.* 2011)。

これらの遺物以上に人間活動を直接的に示す証拠として、住居跡があげられよう。もっとも古いといわれる住居跡は、北部の都市アンツィラナナ (ディエゴ・シユアレス) に近いラカトゥ・ニ・アンザという場所である (Dewar and Wright 1993)。石灰岩の庇の下が雨風をよけるのに利用されたらしく、ここで採集された炭は、古いもので西暦420年頃 (250~590年頃) と同定された。しかしここでも、人間が長期にわたって住んだという証拠はない。洞窟で見つかった遺物 (動物遺存体) を分析してみると、貝類やウニ、魚類、ウミガメといっ

た海生動物に由来するものがほとんどで、食事というよりは漂流者の栄養摂取を連想させる結果が出た。

- 2) 日本人研究者としては、馬淵東一（1974）や、京都大学の東南アジア研究グループ（Takaya 1988）をあげることができる。
- 3) このことを象徴するのが、フランスの民族学者フィリップ・ボジャールの著作であろう。彼は、タナラ人についての浩瀚な民族誌によって学界での地位を築いたが（Beaujard 1983, 1991）、近年では言語や農耕技術についての知見をもとに移住史を論じている（Beaujard 2011）。フィールドワークにもとづく地域研究の蓄積が、先史学の文脈であらためて活用されているのである。
- 4) 環境考古学論争の発端となったバーネイは、この状況を「自然保護と社会科学のあいだに生じた不幸な溝」と表現しているが（Burney 2005）、マダガスカルでの活動にたずさわる者は、いずれの陣営でも溝を埋めようと努力している。極論に走りがちなのは、マダガスカルの現状を見る機会のない支援者たちである。マダガスカルで活動を続ける実務者および研究者は、みずからの活動の説得性を高めるため、むしろ学際性を高める傾向にあると筆者はみている。
- 5) より正確に言えば、文化を複数でとらえることにリアリティがあるいっぽうで、文化を単一なものとしてとらえようとする動きが政治の動きとともに生じたというべきであろう。ふたつの異なる立場は、さまざまな場面でせめぎ合っており、文化を複数でとらえる立場もいまや政治性を帯びつつある。森山（1996）を参照。
- 6) このことはいうまでもなく、マダガスカルの諸文化を18ないし20にまとめられるということではない。ひとつの民族でも、文化的背景が異なる下位集団に細分することはいくらでもできる。実際のところ、民族をどれだけ細分化すれば歴史をとらえるにじゅうぶんかは不明である。しかし、後のくだりで述べるように、きわめて多くの言語が存在するニューギニアなみに文化状況が錯綜しているという可能性も考慮に入れておくべきだろう。
- 7) このことは、ひとつの文化を目ざして統合しつつあるマダガスカルの動きを封ずるものではない。文化の境界を実体化すること、および文化を特定の土地に縛りつけることの政治性については、すでに多くのことが語られてきた（たとえば、クリフォード 2002）。文化の境界を所与のものとし、生物の種の境界のように維持されるとみることが、断固として避けなければならない。しかし、たとえば混淆という現象を記述し理解するうえでも、文化的差異そのものは認めなければならない。近年ではこのことをふまえ、浸透膜を通すかのようにして外から影響を受け入れながら歴史的に変化していくというボアズ流の文化観がみなおされつつある（Bashkow 2004; Bunzl 2004）。本章の主張も、そのような文化観を前提としたうえでのものである。

文 献

Adelaar, K. Alexander

1989 Malay Influence on Malagasy: Linguistic and Culture-Historical Implications. *Oceanic Linguistics* 28(1): 1-46.

1995 Asian Roots of the Malagasy: A Linguistic Perspective. *Bijdragen tot de Taal-Land- en Volkenkunde* 151(3): 325-357.

- 2009 Loanwords in Malagasy. In Martin Haspelmath and Uri Tadmor (eds.) *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook*, pp. 717-746. Berlin: Walter de Gruyter.
- 2010 The Amalgamation of Malagasy. In John Bowden, Nikolaus P. Himmelmann and Malcom Ross (eds.) *A Journey through Austronesian and Papuan Linguistic and Cultural Space: Papers in Honour of Andrew K. Pauley*, pp. 161-178. Canberra: Pacific Linguistics.
- Astuti, Rita Jonathan Parry, and Charles Stafford (eds.)
 2007 *Questions of Anthropology*. Oxford: Berg.
- 安高雄治
 2009 「マダガスカル南西部の自然保護区拡張における問題と展望」 *The Journal of Policy Studies* 31: 1-10。
- Bashkow, Ira
 2004 A Neo-Boasian Conception of Cultural Boundaries. *American Anthropologist* 106(3): 443-458.
- Beaujard, Philippe
 1983 *Princes et paysans — Les Tanala de l'Ikongo: Un espace social du sud-est de Madagascar*. Paris: L'Harmattan.
 1991 *Mythe et société à Madagascar (Tañala de l'Ikongo): Le chasseur d'oiseaux et la princesse du ciel*. Paris: L'Harmattan.
 2011 The First Migrants to Madagascar and Their Introduction of Plants: Linguistic and Ethnological Evidence. *Azania* 46(2): 169-189.
- Blench, Roger
 2007 New Paleozoogeographical Evidence for the Settlement of Madagascar. *Azania* 42: 69-82.
 2008 The Austronesians in Madagascar and Their Interaction with the Bantu of the East African Coast: Surveying the Linguistic Evidence for Domestic and Translocated Animals. *Studies in Philippine Languages and Cultures* 18: 18-43.
- Bloch, Maurice
 1971 *Placing the Dead*. Prospect Heights: Waveland Press.
 1998 *How We Think They Think: Anthropological Approaches to Cognition, Memory, and Literacy*. Oxford: Westview Press.
 2005 *Essays on Cultural Transmission*. Oxford: Berg.
- Bunzl, Matti
 2004 Boas, Foucault, and the "Native Anthropologist": Notes toward a Neo-Boasian Anthropology. *American Anthropologist* 106(3): 435-442.
- Burney, David A.
 1987 Late Holocene Vegetational Change in Central Madagascar. *Quaternary Research* 28: 130-143.
 1993 Late Holocene Environmental Changes in Arid Southwestern Madagascar. *Quaternary Research* 40: 98-106.
 2005 Finding the Connections between Paleoecology, Ethnobotany, and Conservation in

- Madagascar. *Ethnobotany Research and Applications* 3: 385–389.
- Burney, David A. and Timothy Flannery
 2005 Fifty Millennia of Catastrophic Extinctions after Human Contact. *Trends in Ecology and Evolution* 20(7): 395–401.
- Burney, David A., Lida Pigott Burney, Laurie R. Godfrey, Willian L. Jungers, Steven M. Goodman, Henry T. Wright, and A. J. Timothy Jull
 2004 A Chronology for Late Prehistoric Madagascar. *Journal of Human Evolution* 47: 25–63.
- Callet, R. P. (ed.)
 1974 *Histoire des rois, ou Tantarn' ny Andriana eto Madagascar*. 3 tomes, traduction par G.-S. Chapus et E. Ratsimba. Antananarivo: Librairie de Madagascar.
 クリフォード, ジェイムズ
 2002 『ルーツ——20世紀後期の旅と翻訳』毛利嘉孝ほか訳, 東京: 月曜社。
- Dahl, Otto Chr
 1951 *Malgache et Maanjan: Une comparaison linguistique*. Oslo: Egede-Instituttet.
 1991 *Migration from Kalimanta to Madagascar*. Oslo: Norwegian University Press.
 デシャン, ユベール
 1989 『マダガスカル』木村正明訳, 東京: 白水社。
- Dewar, Robert E.
 1997a Does It Matter that Madagascar Is an Island? *Human Ecology* 25(3): 481–489.
 1997b Were People Responsible for the Extinction of Madagascar's Subfossils, and How Will We Ever Know? In S. M. Goodman and B. D. Patterson (eds.) *Natural Change and Human Impact in Madagascar*, pp. 364–377. Washington, D.C.: Smithsonian.
- Dewar, Robert E. and Henry T. Wright
 1993 The Culture History of Madagascar, *Journal of World Prehistory* 7 (4) : 417–465.
- Domenichini-Ramiaramanana, Bacoly
 1988 Madagascar. In M. E. Fasi (ed.) *Africa from the Seventh to the Eleventh Century (General History of Africa III)*, pp. 681–703. Paris: Unesco.
- Esoavelomandroso, F.
 1984 Madagascar and the Neighbouring Islands from the 12th to the 16th Century. In D. T. Niane (ed.) *Africa from the Twelfth to the Sixteenth Century (General history of Africa IV)*, pp. 597–613. Paris: Unesco.
- Ferrand, Gabriel
 1907 Les îles Râminy, Lâmery, Wâkwâk, Komor des geographes arabes, et Madagascar. *Journal Asiatique* (10ème serie) 10: 433–566.
 1907–08 Le K'ouen-Louen et les anciennes navigations interocéaniques dans les mers du sud. *Journal Asiatique* (11ème serie) 13: 239–333, 431–492; 14: 5–68, 201–241.
- Gezon, Lisa L.
 2006 *Global Visions, Local Landscapes: A Political Ecology of Conservation, Conflict, and Control in Northern Madagascar*. Lanham: Altamira.

- Gommery, Dominique Beby Ramanivosoa, Martine Faure, Claude Guérin, Patrice Kerloc'h, Frank Sénégas, and Hervé Randrianantenaina
 2011 Les plus anciennes traces d'activités anthropiques de Madagascar sur des ossements d'hippopotames subfossiles d'Anjohibe (Province de Mahajanga). *Comptes Rendus Palevol* 10: 271-278.
- Hurles, Matthew E., Bryan C. Sykes, Mark A. Jobling, and Peter Forster
 2005 The Dual Origin of the Malagasy in Island Southeast Asia and East Africa: Evidence from Maternal and Paternal Lineages. *American Journal of Human Genetics* 76: 894-901.
- 飯田卓
 2008 「マダガスカルの多様な文化と社会」池谷和信・武内進一・佐藤廉也編『朝倉世界地理講座 大地と人間の物語12 アフリカⅡ——バントゥアフリカ、西アフリカ沿岸部、島嶼部』pp. 809-821, 朝倉書店。
- Keller, Eva
 2008 The Banana Plant and the Moon: Conservation and the Malagasy Ethos of Life in Masoala, Madagascar. *American Ethnologist* 35(4): 650-664.
 2009 The Danger of Misunderstanding 'Culture'. *Madagascar Conservation and Development* 4(2): 82-85.
- Krause, David W., Joseph H. Hartman, and Neil A. Wells
 1997 Late Cretaceous Vertebrates from Madagascar. In Steven M. Goodman and Bruce D. Patterson (eds.) *Natural Change and Human Impact in Madagascar*, pp. 3-43. Washington, D.C.: Smithsonian.
- Kull, Christian A.
 2004 *Isle of Fire: The Political Ecology of Landscape Burning in Madagascar*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 馬淵東一
 1974 「言語上より見たるインドネシアの物質文化 (一)(二)」『馬淵東一著作集 第二巻』社会思想社, pp. 557-624。
- MacPhee, R. D. E. and David A. Burney
 1991 Dating of Modified Femora of Extinct Dwarf *Hippopotamus* from Southern Madagascar. *Journal of Archaeological Science* 18: 695-706.
- Madagascar
 n.d. *Madagascar Action Plan 2007-2012: A Bold and Exciting Plan for Rapid Development*. Antananarivo: Madagascar.
- Mittermeier, Russell A., William R. Konstant, Frank Hawkins, Edward E. Louis, Oliver Langrand, Jonah Ratsimbazafy, Rodin Rasoloarison, Jörg U. Ganzhorn, Serge Rajaobelina, Ian Tattersall, and David M. Meyers
 2006 *Lemurs of Madagascar Second Edition*. Washington, D.C.: Conservation International.
- 森山工
 1995 『墓を生きる人々——マダガスカル、シハナカにおける社会的実践』東京大学出版会。
 1996 「描かれざる自画像——マダガスカルにおける文化的統一性をめぐる言説」『民族学研

究』 61(1): 81-104。

Munthe, Ludvig

1982 *La tradition arabico-malgache: Vue à travers le manuscrit A-6 d'Oslo et d'autres manuscrits disponibles*. Antananarivo: TPFLM.

Myers, Norman, Russell A. Mittermeier, Cristina G. Mittermeier, Gustavo A. B. da Fonseca, and Jennifer Kent

2000 Biodiversity hotspots for conservation priorities. *Nature* 403: 853-858.

Perez, Ventura R., Laurie R. Godfrey, Malgosia. Nowak-Kemp, David A. Burney, Jonah Ratsimbazafy, and Natalia Vasey

2005 Evidence of Early Butchery of Giant Lemurs in Madagascar. *Journal of Human Evolution* 49: 722-742.

Radimilahy, Chantal

1997 Mahilaka, an Eleventh- to Fourteenth-Century Islamic Port. In Steven M. Goodman and Bruce D. Patterson (eds.) *Natural Change and Human Impact in Madagascar*, pp. 342-363. Washington, D.C.: Smithsonian.

Rakotoarisoa, Jean-Aimé

1997 A Cultural History of Madagascar. In Steven M. Goodman and Bruce D. Patterson (eds.) *Natural Change and Human Impact in Madagascar*, pp. 331-341. Washington, D.C.: Smithsonian.

1998 *Mille ans d'occupation humaine dans le Sud-Est de Madagascar: Anosy, une île au milieu des terres*. Paris: L'Harmattan.

Razafindraibe, Hanta, Vietur A. Mobegi, Sheila C. Ommeh, Rakotondraivo, Gro Bjørnstad, Olivier Hanotte, and Han Jianlin

2008 Mitochondrial DNA Origin of Indigenous Malagasy Chicken: Implication for a Functional Polymorphism at the *Mx* Gene. *Animal Biodiversity and Emerging Diseases* 1149: 77-79.

Takaya, Yoshikazu (ed.)

1988 *Madagascar: Perspectives from the Malay World*. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

Vérin, Pierre

1986 *The History of Civilisation in North Madagascar*, translated by David Smith. Rotterdam: A. A. Balkema.

Wright, Henry and Jean-Aimé Rakotoarisoa

1997 Cultural Transformations and Their Impacts on the Environments of Madagascar. In Steven M. Goodman and Bruce D. Patterson (eds.) *Natural Change and Human Impact in Madagascar*, pp. 309-330. Washington, D.C.: Smithsonian.